

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.084; はじめに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008657">http://hdl.handle.net/10502/00008657</a>

## はじめに

山本紀夫

### 文系と理系の領域を超えて

本書は、2004年度から2006年度にかけて国立民族学博物館（以下、民博と略す）の主催により実施された共同研究「ドメスティケーションの民族生物学的研究」の成果報告書である。この表題にも示されているように、本共同研究は民族学のみならず生物学の成果をも取り込もうとしたものであり、文系と理系の領域を超えた、近年の民博の共同研究としてはほとんど例をみないものであった。そこで、研究対象となったドメスティケーションについて述べる前に、まず民博でこのような文理融合的な共同研究会を実施するにいたった経緯を述べておこう。

民博が創設されてから30年あまりを経過した現在では知る人も少なくなったが、共同研究のあり方については民博の発足以前から「個別の研究分野を越えた共同研究班により共同研究を実施すること」と規定されている。また、この共同研究について、民博の初代館長であった梅棹忠夫は次のように述べている。

「研究者というものは、くりかえしいうが、独善におちいることをもっとも警戒しなければならない。自分の研究テーマを意識の中心にすえるのは当然であろうが、たえずその周辺の関連ある研究の動向に目をくばり、他の領域、他の分野における研究にまで視野をひろげてゆかなければならない。そして、より拡大された視野のなかで、自分自身の研究をといなおすという努力をつづけてゆかなければならない。（中略）そもそも、共同研究会というシステムは、ある意味では、研究者の孤立化とそれにとまなう独善化を、集団的に防止するための装置として、かんがえだされたものであるといえよう」<sup>1)</sup>。

しかし、近年の研究の世界では、理系のみならず、文系の分野でも専門化あるいは細分化が進んでいる。そのためか、文系と理系の領域を超えた研究もほとんどなくなった。おそらく、それゆえに「文理融合」の必要性がさかんに叫ばれるようになったのであろう。その後、さまざまな分野で総合化の重要性が認識された結果、民博が基盤研究機関のひとつになっている総合研究大学院大学（総研大）も生まれた。総研大は、既存の学問分野の枠を超えた学際領域の研究の発展をめざして設立されたのである。

それでは、総研大が生まれてから20年あまりたった今日、はたして「既存の学問分野の枠を超えた学際領域の研究」は発展したのであろうか。また、総研大だからこそ可能になったといえる文理融合の研究はどれくらいあるのだろうか。少なくとも民族学・文化人類学の分野では、いよいよ専門化あるいは細分化に拍車がかかり、理系の領域にまで視野を広げた研究はきわめて乏しくなっているのが現状であろう。

## 民族生物学への道

このような動向の一方で、近年になって既存の学問分野の枠にあきたらず、一部ではあるが異分野横断的な研究をめざす研究者も生まれてきている。それは、主として生物学や農学の分野の研究者たちである。彼らは、生物学や農学だけでなく、広い意味での民族学・文化人類学にまで領域を拡大し、民族植物学や民族動物学など、民族生物学といえる研究領域を志向し、異分野横断的な研究を推進してきたのである。

ただし、これは突然の動きではない。そこに至るまでには、ひとりのバイオニアがいたことを明記しておかなければならない。それは、照葉樹林文化論を提唱したことで知られる故中尾佐助である。中尾は、日本で初めて民族植物学の分野を開拓し、それにもとづいてユニークな農耕文化論を展開、照葉樹林文化論もそのひとつであった<sup>2)</sup>。しかも、中尾の民族植物学は、欧米からの輸入学問ではなく、戦前からのたびかさなる自身のフィールドワークから生み出されたものであった。

このような中尾の考え方に啓発された研究者は少なくないはずである。また、その著作などを通じて民族植物学という分野も次第に認知されるようになり、1970年代に入ると民族植物学を専門とする研究者もあらわれてくるようになる。さらに、1980年以降になると『雑穀のきた道—ユーラシア民族植物誌』や『ムギの民族植物誌』などの民族植物学的な本も刊行されるようになる<sup>3)</sup>。これは民族動物学の分野も例外ではなく、1995年には『民族動物学』というタイトルの本も刊行されている<sup>4)</sup>。そして、1999年には中尾も編者のひとりになっている『オーストロネシアの民族生物学』も刊行された<sup>5)</sup>。

ここで海外にも目を向けておこう。欧米では民族植物学についての関心は早く、1873年には民族植物学の前身である「先住民の植物学 (aboriginal botany)」という用語が使われている。民族植物学 (ethnobotany) という用語が最初に用いられたのは1895年、アメリカでのことであった。その後、1947年から刊行が始まった *Economic Botany* 誌に民族植物学に関連する論文が多く発表されるようになる。1981年には民族生物学に関する国際的な雑誌の *Ethnobiology* 誌が刊行され、その学会も毎年開催されるようになっていく。そして、民族生物学的な単行本は少なくなく、1996年にはその名もずばり *Ethnobotany* という本が刊行され、これは翻訳されて日本でも『民族植物学』の書名で刊行された<sup>6)</sup>。

このようにして見てくると民族生物学は順調に発展してきたように思えるかもしれないが、決してそうではない。とくに、それは日本で顕著である。たとえば、民族生物学の講義は一部の大学でおこなわれているものの、それを専門にする研究室は日本のどこにもない。そのため、民族生物学者もそれに関心をよせる研究者も日本各地の大学や博物館などで農学や生物学、さらに民族学・文化人類学などの研究をおこないながら、お互いに交流もほとんどない状態で、各自が個別に領域を拡大して文理融合的な研究をめざしてきたのである。

このような状況のなかで、数年前から民博で民族生物学の共同研究会をひらいてほしいという声が、あちこちから私によせられるようになった。これは、学生時代から人間と植物との関係に関心をもって研究を進めてきた私にとって嬉しい提案であった。ただし、民族生物学の共同研究会で何をテーマにするのか、どのような研究会にするのか、そのイメージがなかなかつかめなかった。人間と生物との関係は、きわめて古く、かつ多様であり、どの部分に焦点をあてるかによって研究会のあり方が大きく異なってくるからだ。そのため、テーマの選択および準備に数年を要し、最終的に選んだテーマがドメスティケーションであった。

### ドメスティケーション研究へのアプローチ

ドメスティケーションとは、住まいや家、町、家庭、家族などを意味するラテン語のドムス（domus）に由来し<sup>7)</sup>、人間が関与する環境に動植物が持ち込まれて変化を生じることである。そして、日本語では植物の場合が栽培化、動物の場合が家畜化と訳されている。ときに、ドメスティケーションは順化・馴化とも訳されるが、『広辞苑』によれば、順化・馴化とは「異なる環境に移された生物が、次第になれて、その環境に適応した性質をもつようになること」であり、高度順化のように一時的に適応した状態であっても順化とされる。しかし、ここで扱おうとするドメスティケーションとは、遺伝的に変化し、形態や生理などの点でも野生の動植物とは大きく異なった栽培植物や家畜に変化することを指している。

植物におけるドメスティケーション、すなわち栽培化における変化に関してはラディジンスキーがその著書『栽培植物の進化』の冒頭で、「栽培下での植物の進化は、自然の植物進化とは異なり、次のような特徴がある」として、以下のように簡潔にまとめている<sup>8)</sup>。

- ① 農業が始まって以来、せいぜい1万年以内の出来事であること。
- ② 多くの主要作物の祖先が野生種として現在も生育していること。
- ③ 人類が重要な役割を果たしてきたこと。

これらは植物の栽培化に関して述べられたものであるが、基本的には動物の家畜化に関しても同じようなことが言えそうである<sup>9)</sup>。とくに、これらの特徴の中で注目すべき点は、③の人類が重要な役割を果たしてきたことである。それというのも、ドメスティケーションとは簡単にいえば人間が長い年月をかけて動植物を自分たちにとって都合の良いように改変することであり、その結果生まれたものが栽培植物であり、家畜だからである。すなわち、栽培植物や家畜は人間と動植物との長く密接な関係の中から生まれたものであり、それゆえにこそドメスティケーションを民族生物学の共同研究会のテー

マとして真っ先に扱うべきだと判断したのである。

一方で、人類史上において植物の栽培および家畜飼育の開始は食料の採集から生産へと画期的な変革をもたらしたことが知られており、そのきっかけになったものこそがドメスティケーションであった。したがって、動植物のドメスティケーションは農耕や牧畜の起源とも密接な関係をもつため、考古学や人類学、農学などの分野ですでに膨大な研究成果がある。そのような状況のなかで、2、3年間の短い共同研究会でドメスティケーション研究に貢献できるような新たな知見が加えられるだろうか、という疑問もあった。

### 先行研究における大きな見落とし

そのため、これまでのドメスティケーション研究をレビューしてみたところ、先行研究には大きな見落としがあることに気づいた。それは、ドメスティケーションを過去の出来事であるとみなす考え方である。しかし、ドメスティケーションは決して過去において終わってしまった事象ではなく、動植物のなかには現在もドメスティケーションが進行中のものもある。その典型的な例が、中尾の注目した「半栽培」であろう。

中尾によれば、「半栽培」とは野生植物の利用段階から栽培植物にいたる中間の段階の植物であるとされる。そして、「この段階をよくしらべることができれば、人類の農業開始という大革命の経過がすっかり明らかになるといえよう」とまで中尾は述べている。一方で、草本性の栽培植物では、半栽培の状態が確認された例は非常に少ないとも述べている<sup>10)</sup>。

しかし、中尾の主張とは異なり、半栽培の状態にとどまる植物は少なくない。これは、中尾の調査した時代以降に世界各地でフィールドワークがさかんにおこなわれるようになり、そのなかで動植物と人間の関係に関する事例報告が増えたことによるのであろう。たとえば、阪本寧男は半栽培植物の例としてスイタクワイをとりあげ、栽培化に関して示唆に富む指摘をしている<sup>11)</sup>。また、山本紀夫は、トウガラシを例として原産地の南アメリカでは野生型と栽培型の中間タイプが多く存在することを指摘し、その栽培化についても議論している<sup>12)</sup>。さらに、土屋和三と山本紀夫は、半栽培状態で利用されるヒマラヤのサトイモ科植物の例を報告し、その利用について報告している<sup>13)</sup>。おそらく、世界を広く見渡せば半栽培植物の例は少なくないはずであり、このような半栽培植物と人間との関わり合いを詳しく調査すれば栽培化に関して貴重な示唆が得られるであろう。また、これは植物に限らず、動物の場合でも言えることであろう。

実際に、人類学者の松井健は半栽培の概念を家畜にまで拡大し、「セミ・ドメスティケーション」という概念を提唱、ドメスティケーションの具体的な像を構成するために民族誌研究の成果の利用を提案している<sup>14)</sup>。その背景には、考古学も農学も、さらに遺伝学なども、動植物の生物としての形質の変化に研究の重点をおき、ドメスティケーシ

ョンに人間がどのようにかかわってきたのかという視点が希薄であったという事情がある。

そこで、本共同研究会では、ドメスティケーションにかかわる人間の行為や認識を重視することにした。また、ドメスティケーションを過去のものとしてとらえるのではなく、現在進行中のものであるという視点も重視した。ドメスティケーション研究では、あまり重視されない品種分化などの問題を積極的に取り上げようとしたのも、品種分化はドメスティケーションの延長線上にあると考えたからにはほかならない。さらに、世界各地の諸民族による在来の知識や技術などが、ドメスティケーションのプロセスに大きな役割を果たしたという視点も重要である。

なお、現在進行中といえ、近年のバイオテクノロジーの進展による新たな品種の開発も重要なテーマであるが、このテーマは本共同研究会では視野に入れつつも本格的に取り上げることは時期尚早と判断した。その最大の理由は、バイオテクノロジーによる新品種を開発を民族生物学的にどのように扱うことができるのかという展望をもてなかったからである。たしかに、一部ではすでに遺伝子組み換えなどによる作物が普及しつつあり、またヒツジやヤギ、ウマ、ブタなどの哺乳動物では体細胞由来のクローン作成の成功例も報告されるようになってきている。が、このようなバイオテクノロジーの進展による新品種を開発を従来のドメスティケーションの枠組みのなかにどのように位置づけられるのか、それとも位置づけられないのか、それは今後に残された大きな、そして興味深い課題である<sup>15)</sup>。

### 家畜化だけではないドメスティケーション

以上のような構想のもと、山本紀夫を研究代表者、池谷和信（民博准教授）を副代表者、そして約20名におよぶ全国各地の研究者を共同研究員として、2004年6月、共同研究会のスクリーニングにのぞんだ。ところが、そのスクリーニングで審査委員の一人から思いもかけない、意外な質問があった。その審査委員によれば、「ドメスティケーションとは家畜化のことであり、家畜化であれば対象となる動物はウマ、ヒツジ、ウシ、ヤギなどと少なく、それに20人もの共同研究員は不必要ではないか」というのである。

しかし、先述したようにドメスティケーションには動物の家畜化だけでなく、植物の栽培化も含まれる。また、栽培化された植物は、イネやムギ、トウモロコシ、ヒエ、アワなどの穀類、ジャガイモやサツマイモ、ヤムイモ、タロイモ、マニオクなどのイモ類、さらに香辛料作物や果物、野菜などもあり、家畜化された動物よりはるかに多い。このような説明をしたが、その研究者だけでなく、他の審査委員もあまり納得していなかったようだ。これは、私にとって大変大きな驚きであり、また民族学・文化人類学者の常識も疑われた。そこで、その後も注意していると、意外にもドメスティケーションを家畜化と考え、植物の栽培化はまったく念頭にない民族学・文化人類学者の少なくないことに気づいた<sup>16)</sup>。では、これは何に起因するのだろうか。

考えられる最大の要因は、家畜化あるいは家畜の歴史に関する報告書や本のなかに日本でも比較的容易に入手できるものが多いせいではないか<sup>17)</sup>。その背景には、「動物の骨は、考古学的発掘において、最も頻繁に出土する遺物のひとつ」<sup>18)</sup>であり、しかもその骨の年代的な変化から家畜化のプロセスをかなり具体的に明らかにできる場合が少なくないことである。また、動物の家畜化、とくに放牧の対象となる動物の家畜化は、民族学・文化人類学者が大きな関心をよせる遊牧や牧畜文化と密接な関係があることも、栽培化に比べて家畜化の問題に彼らが親しみを感じる一因になっている可能性がある。

それでは、栽培化に関してはどうか。まず、発掘された植物遺物からは、それが野生のものであるか、それとも栽培種であるか、という判断がきわめて難しい。ましてや、考古遺物では一部の穀物などを例外として、栽培化のプロセスを具体的に知ることはほとんど不可能である。また、栽培植物の起源や栽培化に関する論考は先述した *Economic Botany* 誌に数多く掲載されているし、論文集も少なくないが<sup>19)</sup>、これらの論考は専門家以外にはなかなか目に触れる機会がないのかもしれない。一方、日本語では、栽培植物全体について扱ったものとして有名な中尾佐助著『栽培植物と農耕の起源』（岩波新書）や田中正武著『栽培植物の起原』（日本放送出版協会）があるが、ともに栽培化にかかわった人間の行為や意識についてはほとんど触れていないのである<sup>20)</sup>。

こうして、家畜化に比べれば、栽培化に関心をもつ民族学・文化人類学者は少なくなるのかもしれないが、人類史において栽培化の重要性は家畜化のそれに比べて優るとも劣らないものである。これは、たとえば、この地球上に栽培植物が存在しなかったことを考えてみれば明らかであろう。私たちが日常的に食べている食糧のほとんどは、コムギやパンの材料となるコムギ、その他の栽培植物だからである。

## 考古学との連携を求めて

以上のようなことを考慮に入れた結果、本共同研究会では、ドメスティケーションを過去に終わってしまった事象ととらえるのではなく、現在も進行中の出来事であるという視点、さらに家畜化よりも栽培化を重視することにした。そのため、参加を要請した共同研究員のなかに従来のドメスティケーション研究で中心的な役割を果たしてきた考古学者が少なくなり、このような方針に対して共同研究員の一部から異議が唱えられた。すなわち、ドメスティケーション研究を進めるためには、考古学者にもっと参加してもらうべきだという意見である。

たしかに、これまでのドメスティケーション研究では、考古学が先導的な役割を果たしてきた。チャイルドやブレイドウッドなどの考古学者が西アジアの農耕牧畜起源論に魅力的な仮説を相次いで発表して以来<sup>21)</sup>、世界各地で発掘がさかんにおこなわれ、栽培化・家畜化と密接な関係をもつ農耕や牧畜の起源に関する知見も主として考古学者によって蓄積されてきた。とくに、栽培化や家畜化に関する時期についての年代測定は、考

古学からの貢献を待たなければならないことも事実である。

一方で、ドメスティケーション研究において、考古学だけでは限界があることも指摘しておかなければならない。まず、考古学は基本的に遺物をもとにした学問分野であるため、その研究は考古遺物として残りやすいものを中心として進められることである。その結果、農耕では主として堅果類や穀類など、牧畜では主として獣骨などの遺物が分析対象になってきた。

しかし、人類史において哺乳類などの脊椎動物、そして植物では堅果類や穀類だけが重要であったわけではない。たとえば、食糧源に限っても根茎類、いわゆるイモ類によって生存が支えられた民族も少なくなかったはずである。ところが、一般にイモ類は水分を多く含んでいるため腐りやすく、また食べればほとんど何も残らない。さらに、イモ類を収穫するための道具も堀棒であったと考えられるが、これも木製であったせいで残りにくいいため、イモ類の栽培に関する考古学的証拠はきわめて乏しい。その結果、地球上でもっとも古くから始まったとされる根茎農耕にもかかわらず、それが考古学の分野で注目されることはほとんどなかったのである<sup>22)</sup>。

考古学におけるドメスティケーション研究には、もうひとつの大きな問題がある。それは、遺物の残りやすい乾燥地域に発掘が集中してきたことである。しかし、人類が生存の舞台にしてきた地域は乾燥地域だけでなく、湿潤地域なども含めて多様な環境に広がってきた。そして、このような環境でも栽培化あるいは家畜化されたと考えられる動植物が少なくない。たとえば、私の主たる調査対象地域である中央アンデスでも、発掘は主として砂漠に位置する海岸地帯でおこなわれてきたが、主要な栽培植物のほとんどが海岸地帯ではなく、雨季に降雨をみる山岳地帯を起源地とするのである。

つまり、考古学を中心とするドメスティケーション研究では、対象となる動植物も、また対象となる地域にもかなりの偏りがみられるのである。その偏りを補うためにも、本共同研究会では考古学中心ではなく、民族学・文化人類学、農学、植物学などの民族生物学的な分野を中心としてドメスティケーション研究に挑戦してみようと考えたのだ。そのため、栽培化の問題では、穀類の専門家だけではなく、従来のドメスティケーション研究ではあまり扱われなかったイモ類や擬穀類、野菜などの専門家にも共同研究員として参加してもらった。また、家畜化でも、従来は中心的に扱われてきた旧大陸の家畜のかわりに、これまで等閑視されてきたアンデスの家畜を重点的に取り上げることにし、その専門家たちに参加していただいた。

もちろん、これは考古学を排除することではなく、考古学者と他分野の研究者の連携を求めて、そのあり方を探ろうとする試みでもあった。研究分野においても、対象とする調査地域においても、縄張り意識を捨てて考古学者と関連分野の研究者が連携して複眼的に研究を推進してこそ、ドメスティケーションの全体像が明らかになると考えたからである<sup>23)</sup>。そのため、共同研究員には考古学や民族考古学を専門とする研究者にも参



加していただいたし、機会をとらえてはゲストスピーカーとして考古学者に発表していただく機会もつくることにした。さらに、共同研究員には自然地理学を専門にする研究者も参加してもらったし、ゲストスピーカーには霊長類学や生態人類学などの関連分野の専門家にも発表していただく機会をもうけることにした。これは、梅棹の主張するように、研究者は「たえずその周辺の関連ある研究の動向に目をくばり、他の領域、他の分野における研究にまで視野をひろげてゆかなければならない」と考えたからにはほかならない。

### 共同研究会の発表者と題目

さて、以上のような構想のもとに、共同研究会は2005年1月から2007年3月まで10回にわたって実施された。発表者および発表題目は以下のとおりである（所属は発表当時のもの。※はゲストスピーカー）。

#### 第1回（2005年1月29日～30日 於民博）

- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| 山本紀夫（民博）                 | 「研究会を始めるにあたって」          |
| 阪本寧男（京都大学名誉教授）           | 「穀類の起源を探った私の50年」        |
| 松井 健（東京大学）・佐治 靖（福島県立博物館） | 「野蚕からムシのドメスティケーションを考える」 |
| 稲村哲也（愛知県立大学）             | 「インカの集団追い込み猟チャクとその再生」   |

#### 第2回（2005年3月29日～30日 於日本新薬植物園）

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 秋田 徹（日本新薬植物園）※ | 「薬草のドメスティケーション」  |
| 重田真義（京都大学）     | 「ドメスティケーションとは何か」 |
| 三浦励一（京都大学）     | 「雑草とは何か」         |
| 本江昭夫（帯広畜産大学）   | 「家畜とは何か」         |

#### 第3回（2005年6月25日～26日 於京都大学時計台ホール）

- |             |   |
|-------------|---|
| 山越 言（京都大学）※ | 「ヒトの進化における採食ニッチの変遷—栽培に続く長い道のり」          |
| 市川光男（京都大学）※ | 「中央アフリカ狩猟採集民の環境利用と移動生活」                 |
| 安岡宏和（京都大学）※ | 「カメルーンのバカ・ピグミーによる野生ヤムの疑似栽培」             |
| 竹沢尚一郎（民博）※  | 「ニジェール川中流域における穀物栽培の起源—西アフリカの農業起源論との関係で」 |
| 池谷和信（民博）    | 「アフリカ南部におけるスイカの採集と栽培について」               |

## 第4回 (2005年10月21日～22日 於鹿児島大学)

- 落合雪野 (鹿児島大学) 「植物のビーズ」  
 根本和洋 (信州大学) 「抹殺された新大陸起源の作物—アマランサス」  
 藤倉雄司 (帯広畜産大学) 「知られざるアンデスの雑穀—キヌアとカニワ」  
 小松かおり (静岡大学) 「バナナの品種多様性」  
 仁田坂英二 (九州大学) 「日本における伝統的園芸植物のドメスティケーション」

## 第5回 (2005年12月10日～11日 於民博)

- 佐藤洋一郎 (総合地球環境学研究所) 「遺伝学からみたドメスティケーション」  
 宇田津徹朗 (宮崎大学) ※ 「中国におけるイネの起源」  
 野林厚志 (民博) 「中国福建省客家のブタ飼養」  
 松井 章 (奈良文化財研究所) ※ 「考古学におけるブタ研究の現状—その肯定論と否定論」

## 第6回 (2006年3月24日～25日 於民博)

- 山本紀夫 (民博) 「ジャガイモの栽培化とその展開」  
 大山修一 (首都大学東京) 「ラクダ科野生動物とジャガイモ野生種の生態」  
 土屋和三 (龍谷大学) 「ネパール・ヒマラヤにおける野生サトイモ科植物の利用」  
 落合雪野 (鹿児島大学) 「東南アジア大陸部山地のジュズダマとハトムギ—過程としてのドメスティケーションを考える試み」

## 第7回 (2006年7月16日～17日 於民博)

- Peter J. Matthews (民博) 「*Pandanus tectorius* (“adan”) in southern Japan」  
 山本宗立 (京都大学) ※ 「東・南アジアにおけるキダチトウガラシ (*Capsicum frutescens*) の多様性—道端に自生する香辛料—」  
 佐藤靖明 (京都大学) ※ 「東アフリカ高地系バナナの品種多様性をめぐる人びとの認識と行為—ウガンダ中部ブガンダ地域の事例」  
 山本紀夫 (民博) 「何が品種の多様性を生むのか—民族学・考古学・歴史学の視点から」

## 第8回 (2006年9月1日～3日 於帯広畜産大学)

- 佐治 靖 (福島県立博物館) 「ニホンミツバチの伝統的養蜂にみる半家畜化」  
 斎藤玲子 (北方民族資料館) ※ 「アイヌと北方先住民の植物利用の比較」  
 平田昌弘 (帯広畜産大学) ※ 「ミルク加工と牧畜民」  
 福永健二 (県立広島大学) 「トウモロコシの起源とテオシント—系統進化と栽培化遺伝子」

- 第9回（2006年12月9日～10日 於総合地球環境学研究所）
- |                |  |
|----------------|--|
| 川本 芳（京都大学）     | 「アンデス高地で利用されるラクダ科家畜の遺伝的特徴と家畜化をめぐる問題」                             |
| 藤井純夫（金沢大学）     | 「砂漠のドメスティケーション：ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化」                                 |
| 大田正次（福井県立大学）※  | 「ドメスティケーションの場としてのムギ畑」  |
| 木俣美樹男（東京学芸大学）  | 「雑穀の栽培化過程—キビとコラティの比較を中心に」  |
| 縄田栄治（京都大学）     | 「野菜のドメスティケーションを考える」  |
| 西本由利子（統計数理研究所） | 「品種改良としてのバイオテクノロジー」  |
| 石川祐子（京都大学）     | 「kodo millet ( <i>Paspalum scrobiculatum</i> L.) の生態的、遺伝的特徴と栽培化」 |
- 第10回（2007年3月24日～25日 於民博）
- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| 河瀬眞琴（農業生物資源研究所） | 「アワの起源とアジアにおけるモチアワの進化」 |
| 末原達郎（京都大学）      | 「栽培植物の多様性と経済原理」        |
- 成果出版打ち合わせ

### かつては珍しくなかった文理融合的な共同研究会

以上の発表者名や発表題目にも見られるように、本共同研究会では民族生物学者のみならず、霊長類学、生態人類学、さらに考古学などの分野の研究者にもゲストスピーカーとしてしばしば発表していただいた。これは、先述したように民族生物学的な研究を中心にすえながらも、他の分野や領域も視野に入れ、より拡大された視野のなかでドメスティケーション研究を問い直そうという試みであった。また、共同研究員のなかには、民族生物学というよりは、むしろ最新の生物学的あるいは遺伝学的な手法により栽培植物や家畜の起源を扱う研究者もいたが、これも現在の生物学の到達点を知る上で大きな意味があった。先述したように、近年の生物学や遺伝学はきわめて細分化あるいは専門化しており、そのような最新の知見を他分野の研究者が知ることは困難になっているからである。

もちろん、大きく分野が異なれば、その分野から遠く離れた研究者が理解することは困難になりがちである。とくに、理系の研究者の発表は難解な専門用語が多く、文系の研究者には理解しにくかったことは否定できない。おそらく、このような理由もあって近年の民族学・文化人類学からは、理系の分野にまで領域を拡大した共同研究がほとんど姿を消したのであろう。

実際に、かつては民博でも理系の研究者も含めた共同研究会は珍しくはなかった。生物学あるいは農学関係の研究者が参加した研究会だけでも、「牧畜社会の比較研究」「茶

の文化に関する総合的研究」「日本における作物栽培技術の成立と展開」「農耕と牧畜社会の生活様式の比較民族学的研究」「生態と文化の共生」「自然と文化の重層性に関する人類学的研究」「酒と飲酒の文化」「オーストロネシア文化の重層性に関する比較研究」「ヒマラヤ高地における環境利用の民族学的研究」「熱帯高地における環境の利用と保全に関する総合的研究」など少なくなかった<sup>24)</sup>。そして、これらの研究会はいずれも生物学や農学など理系の分野の研究者が積極的に参加し、まさしく文理融合的かつユニークな成果をあげ、さらに下記のような成果報告書も刊行してきたのである。

- ・梅棹忠夫監・守屋 毅編『茶の文化：その総合的研究』淡交社，1981年
- ・福井勝義・谷 泰編『牧畜文化の原像』日本放送出版協会，1987年
- ・佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生 縄文農耕論へのアプローチ』日本放送出版協会，1988年
- ・佐々木高明編『農耕の技術と文化』集英社，1993年
- ・掛谷 誠編『地球に生きる2 環境の社会化』雄山閣，1994年
- ・大塚柳太郎編『地球に生きる3 資源への文化適応』雄山閣，1994年
- ・福井勝義編『地球に生きる4 自然と人間の共生』雄山閣，1995年
- ・石毛直道編『論集 酒と飲酒の文化』平凡社，1998年
- ・中尾佐助・秋道智彌編『オーストロネシアの民族生物学』1999年
- ・山本紀夫・稲村哲也編『ヒマラヤの環境誌 山岳地域の自然とシェルパの世界』八坂書房，2000年
- ・山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会，2007年

## 民族学・文化人類学の活性化をはかるために

先述したように研究の世界が専門化・細分化するにしたがって、民族学・文化人類学者は理系の研究者との交流が次第になくなり、民博でも理系にまで領域を広げた共同研究会はほとんど姿を消した。その結果、民族学・文化人類学が大きく発展したのであれば問題はない。むしろ、これは歓迎すべきことであろうが、事實は逆のようだ。「民族学は面白くなくなった」「文化人類学は地盤沈下した」という声が学会の内外でしきりに聞かれるようになっているからだ。

そのせいか、近年、民族学・文化人類学の世界は閉塞感におおわれ、そのような状況に危機感をいだく研究者も少なくない。それでは、民博ではどうか。たとえば、研究の中心的な柱である共同研究会は、民博創設から30年をこえて、その勢いを保ちつつけているのであろうか。たしかに、共同研究会の数そのものは創設当時に比べて3倍以上に増えているが<sup>25)</sup>、はたして民博における共同研究会の活力は維持されているのであろうか。

この点で、共同研究会のパイオニアである京都大学人文科学研究所（人文研）において、かつて若手研究者の助手会から共同研究会について問いかけられた次の言葉には傾聴すべきものがあるだろう。

「かつて、共同研究会は、人文科学研究所の生命中枢であった。それは、知性を専門領域の細分化と自閉性から解き放ち、集合的な研究主体の創造と、学問の総合化とを志向するものであった。学問のタコツボ的状况を打破するための試みであったからこそ、共同研究会は新鮮な意味をもちえたのであろう。

しかし今日、共同研究会がなお研究体制の主軸であることに変わりはなくとも、その息吹き、その生命は失われようとしている。現在行われている共同研究は、ほとんど、個人研究の延長か、おしゃべりの会にすぎない。諸々の知性の結集体としての共同研究会は減じ、その形骸化は蔽いがたく進行している。」<sup>26)</sup>

これは、全国各地の大学で学問の意義が真剣に問われ、京都大学もバリケードによる封鎖・解除がくりかえされていた1969年2月に、学問のあり方をめぐって人文研の助手会から研究企画委員会に提出された公開質問状の一部である。この質問状に対して、後に所員会（講師以上で構成され、教授会に相当）は人文研の共同研究会に「惰性と形骸化」が生じていることを認め、その克服のために一年以上もかけて改革案が考え出されたという<sup>27)</sup>。

このときから40年もの年月が流れたが、この助手会からの問いかけは今も依然として共同研究会を主宰する者にとって重い意味をもつであろう。そして、もし民博の共同研究会にもこのような「惰性と形骸化」の影がしのびよっているとすれば、その状況を打破し、新たに飛躍する方法のひとつが、あらためて他分野との交流をさかんにし、活性化をはかることではないだろうか。それも、人文科学や社会科学などの文系の枠の中だけにとじこもらず、「知性を専門領域の細分化と自閉性から解き放つ」ためにも、できれば理系にまで領域を拡大し、より拡大された視野のなかで民族学・文化人類学という学問の存在意義を問い直す努力が必要なのではないか。民博が日本における民族学・文化人類学の研究センターであることを考えれば、そのような努力を民博こそが先導的にこなす必要があるのではないか。

このような問題意識をもっていた私は、民族学・文化人類学の閉塞的状况を打開するためにも、困難を承知で、最近の民博ではほとんど例をみない文系と理系の領域を超えた共同研究会の実施を決意したのである。私事にわたって恐縮であるが、この共同研究会は私が民博在職中に研究代表者として実施した最後のものではあった。それだけに、本研究会の成果が、民族生物学の発展とともに、現在の民族学・文化人類学に少しでも刺激を与えられることを願ってやまない。

## 注

- 1) 梅棹忠夫「国立民族学博物館における研究のあり方について」『国立民族学博物館研究報告』1 卷4号896-938, 国立民族学博物館, 1977年。
- 2) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波新書, 1966年。
- 3) 阪本寧男『雑穀のきた道—ユーラシア民族植物誌から』日本放送出版協会, 1988年。  
阪本寧男『ムギの民族植物誌 フィールド調査から』学会出版センター, 1996年。
- 4) 周 達生『民族動物学—アジアのフィールドから』東京大学出版会, 1995年。
- 5) 中尾佐助・秋道智彌編『オーストロネシアの民族生物学』平凡社, 1999年。
- 6) C. M. Cotton *Ethnobotany: Principles and Applications*. John Wiley & Sons, Ltd. 1996.  
コットン, C. M.『民族植物学—原理と応用—』(木俣美樹男・石川祐子訳) 八坂書房, 2004年。
- 7) Harlan, J. R. Origin and processes of domestication. G. P. Chapman (ed.) *Grass Evolution and Domestication*. Cambridge Univ. Press. Cambridge, pp. 159-175, 1992.
- 8) ラディジンスキー, G.『栽培植物の進化 自然と人間がつくる生物多様性』(藤巻宏訳), 農文協, 2000年。
- 9) 家畜については, ウシの野生種のオーロックスやウマの野生種のモウコノウマなどのように一部のもの絶滅しているものの, 大半の野生種は現存しているとされる。以上, 川本 芳京都大学霊長類研究所准教授のご教示による。
- 10) 中尾佐助『栽培植物の世界』中央公論社, 1976年。
- 11) 阪本寧男「半栽培をめぐる植物と人間の共生関係」福井勝義編『講座 地球に生きる4 自然と人間の共生』雄山閣出版, pp. 17-36, 1995年。
- 12) 山本紀夫「栽培化とは何か: トウガラシの場合」福井勝義編『講座 地球に生きる4 自然と人間の共生』雄山閣出版, pp. 61-93, 1995年。
- 13) 土屋和三・山本紀夫「有毒イモを食べる—半栽培植物の利用」山本紀夫・稲村哲也編『ヒマラヤの環境誌 山岳地域の自然とシェルパの世界』八坂書房, pp. 139-157, 2000年。
- 14) 松井 健『セミ・ドメスティケーション 農耕と遊牧の起源再考』海鳴社, 1989年。
- 15) 最近, Zedder は以下の論文で動植物のドメスティケーション研究のレビューをおこなっているが, そこではバイオテクノロジーによる新品種の開発についてまったく言及していない。これは彼女が考古学者であり, その視点が農耕の起源など過去の問題に向いているからであろう。  
Zedder, M. A. Central Question in the Domestication of Plants and Animals. *Evolutionary Anthropology* 15: 105-117, 2006.  
一方, 自然人類学者の松井健は, 前掲書で農耕や牧畜の起源を扱いながら, バイオテクノロジーの急激な発展も視野に入れ, 遺伝学の進歩によって「過去におこなわれたドメスティケーションに要した年月の千分の一とか, 数百分の一の時間によって, より効率的で意図的な新しい家畜や栽培植物の創出がおこなわれることだろう」と述べて, 現在を「第二のドメスティケーション革命の時代」とする。
- 16) たとえば, 最近も文化人類学者の松園は以下の発言のなかで「人類が野生動物を家畜化していった長い過程, ドメスティケーション」と述べている。  
松園万亀雄「館長は語る 大学共同利用機関としての役割」『論壇 人間文化』人間文化機構, pp. 203-213, 2008年。
- 17) たとえば, 日本語でも読める本には以下のようなものがある。  
加茂儀一『家畜文化史』法政大学出版局, 1973年。  
デンバック, H.『家畜のきた道』(小西正泰・渡辺清訳) 築地書館, 1979年。

- 野澤 謙・西田隆雄『家畜と人間』出光書店, 1979年。  
 ゾイナー, F. E. 『家畜の歴史』(国分直一・木村伸義訳)法政大学出版局, 1983年。  
 クラットン=ブロック, J. 『図説 動物文化史辞典 人間と家畜の歴史』(増井久代訳)原書房, 1989年。
- 18) ラッカム, ジェイムズ 『動物の考古学』(本郷一美訳)学藝書林, 1997年。
- 19) たとえば, 栽培化に関して重要な論文集には以下のようなものがある。  
 Ucko, P. J. and G. W. Dimbleby (eds.) *The Domestication and Exploitation of Plants and Animals*. Aldine Publishing Co. Chicago, 1969.  
 Harlan, J. R., J. M. J. De Wet, A. B. L. Stemler *Origins of African Plant Domestication*. Mouton, Paris, 1976.  
 Harris D. R. and G. C. Hilman *Foraging and Farming. The Evolution of Plant Exploitation*. Unwin Hyman, Boston, 1989.  
 Chapman, G. P. (ed.) *Grass Evolution and Domestication*. Cambridge Univ. Press, Cambridge, 1992.  
 Zohary, D. and M. Hopf *Domestication of Plants in the Old World: the Origin and Spread of Cultivated Plants in West Asia, Europe and the Nile Valley*. Oxford University Press, Oxford, 1988.
- 20) 中尾による著書(1966)は主として栽培化後の農耕文化について述べており, 田中の著書(1975)はもっぱら遺伝学の立場から生物学的に栽培植物の起原を扱っている。
- 21) Childe, V. G. *Man Makes Himself*. London, 1936. (チャイルド著, 『文明の起源』(ねず・まさし訳)岩波書店, 1977年)  
 Childe, V. G. *New Light on the Most Ancient East*. New York, 1952.  
 Braidwood, R. J. The agricultural revolution. *Scientific American* 203: 130-141, 1960.  
 Braidwood, R. J. *Prehistoric Men.*, Illinois, 1975. (R. J. ブレイドウッド『先史時代の人類』(泉靖一・増田義郎・大貫良夫・松谷敏雄訳)新潮社, 1969年)
- 22) 一方, 民族植物学, 地理学, 民族歴史学, 農学などの分野では, 人類史における根栽農耕の重要性を指摘する研究者が少なくない。その代表的な著作には以下のようなものがある。  
 Sauer, C. O. *Agricultural Origins and Dispersals*. The American Geographical Society 1952 (サウアー『農業の起原』竹内常行・斎藤晃吉訳, 古今書院, 1960年)。  
 中尾佐助『栽培植物と農耕の起原』岩波書店, 1966年。  
 Murra, J. *La Organización Económica del Estado Inca*. Siglo XXI: Mexico.  
 吉田集而・堀田満・印東道子編『人類の生存を支えた根栽農耕 イモとヒト』平凡社, 2003年。  
 山本紀夫『ジャガイモとインカ帝国—文明を生んだ植物』東京大学出版会, 2004年。
- 23) 実際に, 私は前掲の拙著でも考古学の貢献を重視し, その成果を積極的に取り込んで民族学や農学との総合的な視点からアンデスにおける農耕文化の特徴を明らかにしようと試みた。この点の詳細については以下の拙稿を参照されたい。  
 山本紀夫「アンデス研究のさらなる発展をめざして—大貫良夫氏のご批判にお答えする—」『古代アメリカ』8号: 93-102, 2005年。
- 24) ここでは民博・地域企画交流センターのスタッフによる共同研究会は含んでいない。
- 25) 民博で共同研究会が開始されたのは1976年のことで, 当時の共同研究会数はわずかに13件であったが, 今年(2008年)度に民博でおこなわれている共同研究会は46件にのぼる。
- 26) 斎藤清明『京大人文研』創隆社, pp. 249-250, 1986年。
- 27) 太田武男他『人文科学研究所50年』京都大学人文科学研究所, 1979年。